序言

本ディスカッション・ペーパー『装いと規範４――「価値」が生まれるとき』（CIRAS Discussion Paper No.102、京都大学東南アジア地域研究研究所、2021年）は、ワークショップ「装いと規範」第４回（2021年２月６日開催）の記録を基にしたものである。このワークショップは、新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて――関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学）の計画研究Ｂ01「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子）主催、京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS共同利用・共同研究プロジェクト「中央ユーラシアおよび中東ムスリムの家族・ジェンダーをめぐる規範――言説とネットワークの超域的展開」（研究代表者：磯貝真澄、東北大学）共催により実施された。

「装いと規範」と題するワークショップは2018年より毎年開催してきたもので、過去の第１回～第３回の開催報告、ならびにそれぞれの成果として刊行したディスカッション・ペーパーについては以下をご参照いただきたい。

●**第１回**（2018年２月10日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20180603.html

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範――現代におけるムスリム女性の選択とその行方』（CIRAS Discussion Paper No.80、京都大学東南アジア地域研究研究所、2018年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/234695

●**第２回**（2019年２月９日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20190113.html#article

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範２――更新される伝統とその継承』（CIRAS Discussion Paper No.85、京都大学東南アジア地域研究研究所、2019年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/244062

●**第３回**（2020年２月10日、京都大学にて開催）

開催報告：http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/activities/activities20200128.html#article

ディスカッション・ペーパー：帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範３――「伝統」と「ナショナル」を問い直す』（CIRAS Discussion Paper No. 95、京都大学東南アジア地域研究研究所、2020年）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/252447

当初、イスラーム・ヴェールをはじめとするイスラーム的装いへの関心からスタートし、報告者もコメンテーターもイスラーム圏の研究者であったこのワークショップも、回を重ねるにしたがって、日本のキモノ、アジアの学生服、インドのサリーというように、地域も関心も大きく広がっていくこととなった。この一連の流れの中で、「装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々のファッション（流行の装い）に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代、それぞれの社会における人々が、どのような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きていたのか、その一端を知ることができる」との視座を共有しつつ、「装い」を衣服・衣装に限定せず、装飾品・化粧・髪型なども含むものと広くとらえ、世界各地の事例の多角的検討を通じて、装いから何が見えてくるのかを探る、という趣旨を継承しながら、さらに、装いにおいて「現代」、「国家」、「イデオロギー」がどのような意味をもち、「ローカル」、「ナショナル」、「グローバル」がどのように接合され、あるいは組み直されているのかといった問いがより鮮明に意識されるようになってきた。

今回は、報告者として佐藤若菜（新潟国際情報大学）、香室結美（熊本大学）、松本ますみ（室蘭工業大学）の３氏、コメンテーターとして安城寿子（阪南大学）、杉浦未樹（法政大学）、杉本星子（京都文教大学）の３氏をお迎えした。総合司会は帯谷知可（京都大学）が務めた。当日のプログラムは本書47ページに掲載している。オンライン開催という形態ゆえか、参加者は30名を超え、これまでで最大の数となった。以下、各報告について簡略に紹介しよう。

佐藤若菜氏による報告「古着から展示可能な民族衣装へ――中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷」は、その著書『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』（京都大学学術出版会、2020年）で扱われた、中国の少数民族ミャオ族ムウの民族衣装をめぐる人類学的研究をさらに発展させたものである。今日では、豪華な刺繍がほどこされた色鮮やかな、独自性の高い民族衣装として広く世界に知られたミャオ族の衣装に、「展示可能なモノとしての価値」が見出されていく過程を丹念に追い、そこに日本が大きく関わっていたことも明らかにされた。

香室結美氏による報告「ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション――４つのショーから」は、その著書『ふるまいの創造――ナミビア・ヘレロ人における植民地経験と美の諸相』（九州大学出版会、2019年）の一部によるものである。ナミビアのヘレロ人女性が今日「エスニックドレス」として着用する、元々は植民者でありヘレロ人に対しジェノサイドさえ行ったドイツ人の衣装の模倣から発展した「ロングドレス」を取り上げ、国内外で開催された4つのファッションショーの分析を通して、この

ロングドレスをめぐって複雑に交錯する歴史性、信仰、規範、美の追求といった原理について論じている。

松本ますみ氏による報告「唯物論の神はイスラームグッズに祝福を与え給う――世界の工場　中国の経験を垣間見る」は、国内では宗教統制をますます強化しながら、国外に向けてはあらゆる宗教グッズを販売し、その販路を拡大する中国の現状を、その背景も含め、多角的に論じている。今では現地調査がほぼ不可能となった義烏の巨大な見本市のかつての様子や、現在隆盛を極めるネット通販アリババの商品情報などを交えながら、イスラームグッズの生産と流通という視点からもますます存在感を増し、世界を席捲しつつある現代中国の姿が浮き彫りとなった。

続くコメントとディスカッションでは、民族衣装とグローバルなファッション市場の関係性、美意識をめぐる集団内部での世代間格差、歴史・政治・イデオロギーと装いとの関係性、装いに価値が付与される過程における製作者の役割、エスニック・グローバル・ナショナル・ローカルを還流する装いの価値、装いの消費と商品化、民族衣装製作と女性のエンパワーメントとの結びつき、服飾材料の多様化・差異化など、多様な論点が提出され、熱のこもった質疑応答となった。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、本ワークショップとしては初めて、Zoomによるオンライン開催となったが、多数のご参加を得、実りある議論ができたことはたいへん幸いであった。

なお、本書は新学術領域研究（領域提案型）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて――関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（「グローバル関係学」、領域代表：酒井啓子、千葉大学法政経学部教授、研究課題／領域番号1801）計画研究Ｂ01「規範とアイデンティティ――社会的紐帯とナショナリズムの間」（研究代表者：酒井啓子、研究課題／領域番号16H06549）の2020年度の研究成果の一部である。

2021年3月

帯谷 知可